

ロビンソン—島—フライデー

——方法としての〈島〉のための試論——

矢野正俊

目次

はじめに

一 抽象体としてのロビンソン・クルーソー

二 抽象の条件

(i) 〈島〉へ

(ii) 〈島〉にて

(iii) 〈島〉から

三 語りの位相

むすびに代えて

それぞれの時代がこの物語を通して、みずから語り、再認し、その点でよりよくみずからを知りたいという要求を感じていたのだといえよう。

ミシエル・トゥルニエ^{注(1)}

はじめに

ホメロスの『オデュッセイア』を筆頭として、西欧には「海洋冒険物語」とでもいえるジャンルが存在するが、日本においてはあまり盛んではない。したがって、海に出て暴風雨に遭い、船が難破して漂着した〈島〉(多くは無入島)で、想像力を駆使した試行を繰り返していき、といった西欧ではパターン化したときえいえる物語もあまり多くない。まわりを海に囲まれていながら、なぜ日本には海く島を舞台とした作品が少ないのだろうか。

最近の日本史学が「日本民族」の基底を問うという大きなテーマのなかで、「日本島国論の虚構性」を指摘する視座のひとつとして、「島国論」に基づく日本論が、日本国内の島々の間の海だけを、人と人とを結びつけるものとしてとらえ、他の海をすべて、人と人とを隔てる海としている点に着目していることはとても興味深い。^{注(2)} 四面環海ゆえに「均質で閉鎖」的な「日本＝島国」という「常識」も、海にたいする視線を考慮したときには、「日本＝島国」の内側(つまり陸)からのものでしかなく、外側から、つまり海のほうからみたときには、「均質で閉鎖的」であるどころか、異質の要素がさまざまに混在した開放的な未知の相貌を秘めている、というこうした洞察は魅力的である。

今日では、物語という位相から「神話」的な位相にまで転位したかにみえるデフォーの『ロビンソン・クルーソー』^{注(3)}(一七一九)を、トゥルニエの『フライデーあるいは太平洋の冥界』^{注(4)}(一九六七初版。一九七二改訂増補版。)と対比させ

て検討する作業をとおして、わたしもまた、実体化された島、すなわち「島国」というア・プリオリを問い直していきたいと思う。

一 抽象体としてのロビンソン・クルーソー

トウルニエのロビンソンからみると、デフォーの「ロビンソン・クルーソー」とは、すでに高度の抽象体であること、それも、すぐれて西欧的な抽象であることがよくわかる。

こうしたロビンソン物語の抽象性ということを、たとえばマルクスは、その「経済学批判序説」(一八五七)の冒頭において言及している。「生産」の項目を説くにあたって、マルクスは、「ここでとりあつかう対象は、まず物質的生産である。」(強調は原文)とし、「社会で生産をおこなっている個々人、したがって個々人の社会的に規定されている生産が、いうまでもなく出発点である。」と述べたうえで――

スミスやリカードがそこから説きおこしている個々ばらばらの猟師や漁夫は、十八世紀の、空想をまじえない想像のうんだものである。それはロビンソン物語ではあるが、けっして文化史家の考えるように、あまりにも洗練されたものにはたいする反動や、誤解された自然生活への復帰にすぎないものではない。それがこうした自然主義にもとづくものでないのは、ちようどうまれながらに独立している諸主体を契約によって関係させ結合させるルソーの社会契約がそうでないのと同様である。この自然主義は、大小さまざまのロビンソン物語のみせかけであり、しかもただその美的なみせかけであるにすぎない。それはむしろ十六世紀以来準備され、十八世紀にその成熟への巨歩をすすめた「ブ

ルジョア社会」を先廻りしてしめしたものである。この自由競争の社会では、個々人は、それ以前のもろもろの歴史時代にかれを一定のかぎられた人間の集団の一員にしていた自然的な結びつきなどから、解放されてあらわれる。スミスやリカアドがまだまったくその影響のもとにあつた十八世紀の予言者たちは、こうした十八世紀の個人——一方では封建的社会形態の解体の、他方では十六世紀のかた新しく発展した生産諸力の産物——を、過去に、実在したかのごとく考へて、理想として思いうかべていたのである。歴史の結果としてではなく、むしろ歴史の出発点として。なぜならば、自然にしたがうものとして個人は、人間性についてのかれらの表象にふさわしく、歴史的にできあがつたものではなく、むしろ自然によつてうみだされたものだと思われていたから。こうした錯覚は、これまでいつでも新しい時代にはつきものであつた。^(註5) (強調は引用者。)

スミスやリカアドに代表される経済学におけるロビンソン物語は、「空想をまじえない想像のうんだものである」とのマルクスの指摘は興味深い。

それはけつして「自然主義」にもとづくものではなく、成熟への途をたどりつつある十八世紀「ブルジョア社会」の個人を理想化したものである。ロビンソン物語とは、封建的な枠組みの解体と新しい生産諸力の発展といった新時代の歴史的な産物にほかならないのだが、そうした歴史の結果としてではなく、歴史の出発点として構想されている。こゝそ、この物語の表出の根拠があるといえる。結果を出発点ととりちがえる、こうした錯覚は、「あたらしい時代」には不可避なものなのである。——ロビンソン物語の抽象性^(註6)ということを、マルクスはその歴史的な観点から洞察している。

周知のとおり、マルクスは『資本論』において、「ロビンソンと彼の手製の富たる諸物とのあいだの一切の連関」のうちにも、「価値のいっさいの本質的な規定が含まれている」として、その価値論を展開していくが、その展開過程におい

てロビンソン物語は、歴史的な産物として「倒錯」を正されていく。あたかも、漂流したロビンソン・クルーソーが流れていった〈島〉のようにも、マルクスの〈価値〉概念の展開は読むことができるかのようで興味深いのだが、さしあたっては、ロビンソン（物語）の抽象性ということのマルクスなりの指摘をみるにとどめておく。

ロビンソン物語が成立した歴史的な基底という観点からのマルクスのこうした指摘とは別に、創作された物語の受容の仕方をめぐって、大塚久雄は次のように述べている。

あのデフォウによって描かれたロビンソンの漂流生活は、われわれ日本人の生活の雰囲気のうちでは、一向リアルな感じを起こさせない。むしろ他人ごとというか、本気では受けとれないような架空の出来事というか、子どもにでも読ませておけばよからうといったくらいに取扱われているように思う。つまり、そこになにかわれわれに身近な切実なものを感じ得しうるといえるのではなく、現実の生活と全く縁もゆかりもない単なる奇譚として受けとられているのがつねではなからうか。だから、もし仮りにわれわれの生活の雰囲気のうちからあつた孤島漂流記が構想されたとしたら、いったい、デフォウが描き出したロビンソンのような積極的な生活の形成がテーマとなってくるだろうか、^{注(7)}こう思うのである。

マックス・ウェーバーに範をとって、ロビンソン・クルーソーに「近代的人間類型とその生活形成」をみる大塚久雄も、ロビンソン物語に注目している。^{注(8)}その解釈にはさまざまな異論もあるが、^{注(9)}物語の受容にさいして、われわれ日本人がこの物語を「単なる奇譚」（孤島漂流譚）として読み流しやすいてんを指摘しているのはさすがだと思ふ。マルクスの言いかたを借りるなら、「空想をまじえない想像のうんだもの」としてでなく、たんなる「空想譚」として読み流しや

すいということであろう。^{注(10)}

また大塚は、「孤島漂流記」の西欧と日本でのちがいの例として、ロビンソンと俊寛とを対比させているが、たしかに野上弥生子『海神丸』、井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』^{注(11)}と思いつくままに「漂流」をあつかった作品をみても、大塚の指摘するとおり、「積極的な生活の形成」という作品的な展開をみることはできないのである。

「空想をまじえない想像のうんだもの」としてのロビンソン物語・抽象体としてのロビンソンを、マルクスのように「価値形態論」を展開していくための傍証としてでなく、また大塚久雄のように「人間類型」の典型とするのでもなく、ここでは、デフォーとトゥルニエの両ロビンソン物語を比較考究することによって、物語が作品として仮構されていく条件を検討することをおして明らかにしていこうと思う。

二 抽象の条件

(i) 〈海〉〈島〉

西欧に特徴的な抽象体としてのロビンソン・クルーソー。こうした抽象に到達するための条件として、まず、〈海〉がある。〈海〉とは、差異づけられた体系としてのあらゆる制度・あらかじめ出来上がっている閉ざされたシステムからの逸脱を許す等価性 (in-difference) の場といってもよい。いつさいの差異づけ (differentiation) をほどこき去っていくものとしての〈海〉。「海——この広い自由な境位、一般性のこの自然的な現存在」^{注(12)} (ヘーゲル)

こうした等価性としての〈海〉へと乗り出していく〈航海〉とは、であれば、いつさいの法則性を逃れ、予断を許さぬ領域としての〈海〉を時間的・空間的に差異づけていく運動にほかならないといえるだろう。

人間は堅固な大地の上で生を営み、さまざまな制度を作りだす。しかし、おのれの生の運動を理解しようとするとき、人間は好んで冒険的な航海の隠喩法にたよるのだ。^{注(13)}

つぎに、〈嵐〉であり〈難破〉であり、〈漂流 (DERIVE)〉である。〈海〉という等価性を時間的・空間的に差異づけていく運動としての〈航海〉は中絶され、いつさいの既成の経験的な世界がカッコのなかにくぐられ、宙吊られたまま、〈漂流〉する。

そして、〈島〉への漂着 (ARRIVER)。この〈島〉を「無人島」として仮構することによって、いわばゼロ度の位相が設定される。このとき、〈島〉はゴールとしてではなく、ロビンソンがそこからスタートするゼロ地点としての時―空として仮構されている。しかし、なにへむかっただのスタートであるのか。

(ii) 〈島〉にて

デフォーのロビンソンは起源へむかってスタートする。

起源へとむかうロビンソンは、当然、既成の差異づけの体系（「難破船」）の反復（「難破船からの資材の搬出」）、すなわち、現実的・経済的な世界の再構築につとめる。ゼロ度として仮構された〈島〉において、ロビンソンはわたしたちの世界の原型としての経済の世界の反復・再生産にひたすら没頭していく。

一枚の板を作るために森の中の大きな木を一本切り倒し、枝を払い落して丸太にすると、その丸太の両側から不要な部分を削り取って、動かせるだけの軽さにする。それから一方を端から端まで、板のように平たく、滑らかにした後、その方を下にして反対の方も同様にし、そういう風にして厚さ三インチ程の板を作っていくプロセスの描写は、何度読み直しても、その過程の手ざわりがたしかに感じられて感動的である。ここには、「一枚の板」の作り出される起源へと遡り、そこから過程をたどり直して現在へと到る様相が、まるでスローモーションの映像を見るように写し出されている。描写は具体的なようにも見えるが、個人の営為としては、高度に抽象的である。だが、荒唐無稽ではけっしてない。デフォーのロビンソンは高度に抽象的な原型としての起源へとたえず出立し、そこからわたしたちの世界の再構築に専念している。「四十二日間」(一) かけて作り上げられた「一枚の板」は、「道具や釘や鉄製品などをおく」「棚」として用いられることになる。

要するにデフォーにおいては、無人島で、他人のいないただひとりの男に何が起こるのかというその意図はよかったが、問題の提示の仕方が悪かったのである。^(注14)

経験の世界を疑いうるものとして妥当性の範囲外におくデカルトの方法的懐疑^(注15)にも重なるゼロ度としての〈島〉、あるいは方法としての〈島〉への漂着、そして〈島〉におけるゼロからのスタートという意図はいい。けれども起源への遡行という方向づけの仕方は、〈島〉でのあらゆる実験(の可能性)をわたしたちの世界の反復・再生産のサイクルへと封じ込めてしまう。「野蛮人フライデー」もまた、ロビンソンにとっての出自(起源)たる「文明人」を原型とする教育をほどこされることにより、主人と従僕という閉じたヒエラルキーの関係へと収斂させられていく。

方法的ゼロ度としての「島」へ到達したロビンソンが、起源の反復・再生産の場へと「島」を変えたとき、「島」からの脱出は「島」と「大陸」との最後のな一体化・同一化とならざるをえなくなる。「島」は「大陸」と地つづきとなり、このとき、方法としての「島」も終焉するのである。

デフォーのロビンソン物語の「続編」は、内容の反復・繰り返しに加えて、語りの繰り返しにおいてもまた特徴的である。^{注16}

フライデーを「従僕」として主従の関係に同一化し、その出現の意味を十全に・実験的に展開することのなかつたデフォーは、この「続編」では、韃靼人の崇拜する偶像を醜悪・野蛮の名の下に焼き払うまでに至っている。^{注17}

無人島への漂着と「島」でのゼロからのスタート、これはいい。しかし、「島」からの帰還にデフォーは失敗したといえるだろう。

(iii) 「島」から

みずからの起源の再構築に一路邁進するデフォーのロビンソンを、ロビンソン物語のいわば「往路」とするならば、目的（未来）をめざすミシエル・トゥルニエのロビンソンは物語の「復路」の位相にあるといえよう。

アレクサンダー・セルカークの現実の冒険（太平洋上のマス・ア・ティエラ島での四年四ヶ月にわたる一人ぼつちの生活と帰還）とダニエル・デフォーの小説（大西洋にあるオリノコ川の河口に近いカリブの島での二十八年におよぶロビンソン・クルーソーの物語）とをくらべて、「実在した与件にダニエル・デフォーの最も天才的な寄与として加わったのが、創造されたフライデーという人物である。」（強調は引用者。）とトゥルニエは指摘している。^{注18}

私の関心を引いていたのは、二つの文明がそれらの進展のある一定の段階で結合したということではなく、人間的な絆をとかれて孤独へと投げ込まれたために、その人間の身体にしみついたどんな文明の痕跡さえも破壊されてゆくその変質作用であり、存在すること・生きることのさまざまな基底がむき出しにされた状態であり、そしてこうした白紙状態のうえに創造されてゆく、さまざまな試行・探り・発見・明証そして恍惚という形をとった新しい世界であった。孤独という療法を経たロビンソンよりも、文明に対してもつと無垢なフライデーは、新しい人間へのガイドであると同時に産科医でもある。こうして、私の小説は創意のある未来を予見したもの (inventif et prospectif) であろうとしているのに対して、もっぱら回顧的 (retrospectif) なデフォーの小説は、失われた文明を自力で回復することの描写にとどまっているといえよう。^{注19)} (強調は引用者。)

起源への遡行とその再構築に終始するデフォーに対して、「創意ある未来の予見」をはらんだロビンソン物語を実現するために、トゥルニエは作品の構成において、変容の三段階を設定している。

① 「泥溜り」(la souille) の段階。——誰かが自分を探しにやって来ることをむなしく期待し、自分の存在を誰かに知らせようと努め、無人島を脱出するために船を建造して挫折した後のロビンソンの絶望と失意の時期であり、「島における彼の生の座標のゼロ度」(ce degré zéro de sa vie insulaire) の段階である。

② 「管理された島」(l'île administrée) の段階。——労働と生産のなかに、もっぱら救済を見いだす清教徒の精神に取り付かれた、島に対するロビンソンの偏執的とさえいえる組織化の時期である。

③ 「太陽の恍惚」(l'extase solaire) の段階。——ロビンソンがその資質の極限(臨界点)で成就する最終的な変身

の段階。それは彼を太陽のほうへと向かわせ、フライデーが完成へと送り届けることになる「太陽ーロビンソン」への変身にほかならない。

起、源ではなく未、来(目的)をめざすトゥルニエのロビンソンの変容の三段階を、ドウルーズは「他者ー構造」(structure Auctui)という観点からさらに展開している。

他者の第一の効果、それは私が知覚するそれぞれの対象、私が思考するそれぞれの観念の周囲に、周辺のな世界、円筒状のもの (un manchon)、地 (un fond) が組織されることである。(中略)私が見ている対象には私には見えない部分があるが、私はそれを他者の方からは見えるのだという風に前提している。だからその自分には見えない部分を見るためにその後ろに周るとき、私は自分には見えなかった部分を見るところよりも、すでにそこを見ていたと前提されていた他者の視点に参加して、予め予知していた事物の全体性を確認するのである。同じように、私たちは自分たちの背後にある事物も世界を結びかたちづくっていると感ずるが、それは、それらは私には見えなくとも他者には可視的であり現に見られていると知っているからである。(中略)他者、は、背後からの襲撃を阻止してくる。(注²⁰) (強調は引用者。)

〈背後〉(をふりかえること)は、トゥルニエの『フライデーあるいは太平洋の冥界』^{リンゴ}という作品において、ロビンソンが変容する、その契機となっているように思われる。

デフォアのロビンソンは、ひたすら前方を見ることにおいて特徴的である。彼が「ふりかえる」のは、「自分の過去の

生活」にたいしてであり、「そこにはただ恐ろしさだけが感じられた。身慄いするほど恐ろしい罪の恐ろしさが感じられた。^{注(21)}——こうした「背後」を彼は「神」に委ねる。「私はこう考えて、私の今の身の上の背後に動いている神の意志にたいしていつさいをゆだねて従おうという気になった。^{注(22)}」

もうひとつある。ある日、偶然、海岸に人間の裸の足跡をみつけたとき、ロビンソンは棒立ちになり混乱し、「自分の要塞」へ大急ぎで引き返すが、途中、何度も「ふりかえる」^{注(23)}。この「心のおびえ」は蛮人たちとフライデーの登場するまでつづくのであるが、「背後」をこうしてふりかえるロビンソンが根底的な変貌をとげることがはけつしてない。

これに対して、トゥルニエのロビンソンの変身は、いずれも「ふりかえる」ことを契機としている。「背後からの襲撃を阻止してくれる」他者を欠いたロビンソンがふりかえる、ということは、存在の、そして精神の真に根底的な冒険である。目の前をみつめることの臨界点(危機点)に到達したとき、ロビンソンは「ふりかえる」。

① 無人島に漂着したロビンソンは、「陸地に頑固に背を向けて、すぐにも救いがやってきそうな海」をみつめつづける。癡狂と紙一重の幻覚と記憶の罟。島に漂着して以来、唯一の仕事であった「脱出号」建造の挫折と「泥溜り」——他者の構造はまだ機能しているが、その機能を満たし、実現する者かもはやいない段階。現実の存在によって占められていないだけに、他者の構造は一層きびしく機能する(ドゥルーズ)^{注(24)}。

彼は起き上がって海をみつめた。すでに最初の太陽の矢を突き刺された、この金属のような海原は、彼を誘惑するものであり、罟であり、阿片であった。もう少しで彼は墮落させられたあげく、錯乱の闇のなかにおちこむところであった。なんとしてでもこの狂気から自分を引き離す力を見つけないければならなかった。島は彼の背後にあった。広大で、

手もつけられないまま、限られた約束ときびしい教訓に満ちたまま。彼は自分の運命をふたたび手中にとり戻すだろう。彼は働くだろう。(……)

海に背を向けると、彼は島の中央に通じている、銀色のアザミで覆われた崩壊した岩の山の中にはいり込んでいった。^{注25)}

(強調は引用者。)——「第2章」

② 「海に背を向け」、島を目の前にして、ロビンソンはひたすら働く。島を探検し、島の資源を調べ上げ、島の地図を作成する。暦を作り、^{ロケブック}「航海日誌」に内的生活を記してゆく。耕作し、建設し、組織し、法律(「スペランザ島憲章」)を制定する。「時間とたたかう必要、時間を封じ込める必要」から「水時計(une clepsydre)」を作り上げる。「管理された島」——ドウルーズはこれを「他者の構造そのものが崩壊し始める段階」とし、他者が事物に与えていた習慣である秩序と仕事を、とにかく維持できるような他者の代理(un substitut d'autrui)を求める時期である、と規定する。過剰な生産、法典の制定、「水時計」による時間の厳密な管理と配分。けれども、こうした労働の活発さと並行して弛緩の徴候もまた垣間見えてくる。

朝、これから開始される一日のスケジュール。びつしりとつまった日程を想像することの果て(臨界点)で、ロビンソンは「ふりかえる」——

(……)このとき、とつぜんロビンソンは遅く目を覚ました原因を理解した。昨夜、水を入れ忘れたために、水時計が止まったところだったのだ。部屋のなかを支配するいつもとは異なる静けさに彼が気づいたのは、実を言えば、銅の器に落ちる水の最後の一滴によってだった。ふり返つてみて、次の水滴が空の壘の底に遠慮がちに現われ、つーと

わたしの生活の中でもっとも変わったもの、それは時間の流れであり、速さであり、方向でさえある。かつては、一日、一時間、一分はそれぞれ次の一日、次の一時間、次の一分へといわば傾いていた(……)

いまや、わたしにとって、時間のサイクルは瞬間と混同されるほどにせままった。循環する運動はもはや不動と区別できないくらいに速くなった。そのため、わたしの日々は直立した、と言えるだろう。一日一日はもう互いの上に倒れこむことはない。垂直に立ち上り、めいめいに固有の価値の中で、しっかりと自分を明確にさせている。^{注28}(強調は原文。)——「第10章」

〈島〉におけるすべての問題を時間ということであらわしてみるとすれば、^{注29}「泥溜り」のなかに溶けこんだ時間に始まり、「水時計」のなかに封じ込んで配分管理した時間を経て、いま、「爆発」によって破碎された時間が、要素(élément)として直立しはじめているといえるだろう。

③ 他者の構造が崩壊し、他者の代理も消滅したとき、もろもろの純粋な要素が立ち上がる。フライデーは他者の構造が消滅したあとに現れたので、他者としては機能しない。他者は結合させる。要素を大地に、大地を身体に、身体を对象に結合させる。だがフライデーは、無心に対象と身体をまっすぐに起こす。大地を空へと移し、要素を解放する。ロビンソンをそのさまざまな地上的な根っこから解放してゆく。そしていま、要素として直立した時間を獲得したとき、ロビンソンの最後の変身が果たされる——「太陽・ロビンソン」(sa métamorphose solaire)への変身。ここでもロビンソンは「ふりかえる」。

首を少し回すと、(En tournant un peu la tête) スペランザ島が、波と接した金色の砂の線、ほとばしる緑、乱雑に積み重なった岩が見えた。このときだ、ホワイトボード号を見送ってフライデーと一緒に島にとどまるといふ決断が、抗い難く自分のなかで熟していることに彼が気づいたのは。彼にこうした決断をとらせたのは、この船の男たちから自分を隔てるいっさいのものにもまして、渦巻く時間にたいする言いようのない拒絶であった。品位を損ない、滅ぶべき (dégradant et mortel) 時間——これこそ、この船の男たちがその周囲にまきちらし、そのなかで生きていたものにほかならなかった。^{注(30)}(強調は引用者。)——「第11章」

島へ食料・水の補給に立ち寄った英国のスクーター船「ホワイトボード号」のまき散らす渦巻く時間。「品位を損ない、滅ぶべき時間」。ただひとり、船員たちと距離を保つ船長ハンターも、自己史の屈折をかかえこんだまま、「抑制された激しい感情に貫かれたすばやい言葉をすこし言つては、敵意とも侮蔑とも思われる沈黙の内に正確なペースでとじこ^{注(31)}も」るだけである。「品位を損な」うことはないが、「滅ぶべき時間」であることに変わりはない。

島へとむかい、島において活動し、島からの帰還を果たしたデフォアのロビンソンにとり、時間は棒のように直線的に伸びきっていた。起源をめぐし、再生産の活動の枠内に終始せざるをえないかぎり、時間は一元的であり、反復・停滞をまぬがれることはできない。停滞をおそれるロビンソンは、またもや無目的・無軌道な放浪の旅に立たざるをえないのである。(『第二部』)

起源への呪縛を解かれたロビンソンが島から帰還した姿を、たとえば詩人は、次のように表現している。

鐘

むき出しの手をした老人、

再び人々の間におかれて、クルーソーよ

思うに きみは泣いたであろう、寺院の塔から街に すすり泣く鐘の音が 流れのようにひろがる時に……

おお すべてを奪われた者よ

きみは泣いたものだ、月下の暗礁に砕ける波、さらに遠い岸辺に咆える風、夜の閉じた翼のかげで 生れかつ消

えてゆく異様な音楽、

あたかも法螺貝のうねってはつながる環のような、海底の喧騒の増幅のような、そんな音楽を想いながら……

注(32)

島から街へと帰還したロビンソン・クルーソーの姿を詩人はしつかりとみすえ、美しくうたっている。すくなくともここには、まっすぐに伸びきった時間軸の上で反復を強いられるデフォーのロビンソンの姿はないだろう。島でのロビンソンと島から帰ったロビンソンとは、連続的でない異質の時間を生きている。時間は複線化し、ねじれ、ゆがんでいく。

いま、トウルニエは時間をこなごなに破碎する。ロビンソンは島を起源からではなく、未来にむけて、目的においてとらえるために、だ。線的ではない、要素としての時間 (le temps élémentaire) が直立する。

とどまること。要素として直立する時間を獲得したロビンソンに、起源ではなく目的へ、過去ではなく未来へと向かわせるために、さいごの変身を成就させるために、トゥルニエはロビンソンが島から脱出することを禁じる。フライデーは島を去るだろう、なぜならフライデーはけっして変身することがないからだ。島にとどまること——このことによつて、島からの本質的な飛躍が目指されているといえるだろう。

ロビンソンのさいごの変身——

実際、彼は今日、ヴァージニア号に乗り込んだ信心深く、けちくさい青年のころよりもずっと若かった。なぜなら彼は、老衰へとひた走る生物学的で、腐敗しやすい、健康な若さで若いのではなかったから。鉱物の、神のような、太陽の若さでもって若かったのだ。彼にとつて毎朝が最初の始まり、世界の歴史の絶対的な始まりだった。太陽・神の下でスペランザ島は過去も未来もなく、永続的な現在のなかで震えていた。ロビンソンは完成の絶頂で均衡を保っているこの永遠の瞬間から自分をひき離して、消耗と塵埃と廃墟の世界に転落するつもりはなかった！——^{注(33)}「第11章」

「太陽への変身 (sa métamorphose solaire)」を成就したロビンソンにとつて、〈背後〉もまた、そのもつ意味を変えていくだろう。〈背後〉はもはや、まったくの未知ではない。もちろん、未知の支配する〈背後〉からの襲撃を防いでくれる他者、構造としての他者を欠いたロビンソンには、〈背後〉が未知から既知へと移行する可能性は奪われている。そうではなく、むしろ、「既知 ↓ 未知」のレヴェルを越えた〈知〉そのものの不断の更新、〈知〉そのものの生成・運動が開始される根拠へと〈背後〉も変容していく。

—「知」が要素として直立していく地平としての「島」。島もまた変わらなければならない。

三 語りの位相

『開かれた社会とその敵』（一九五〇）においてカール・R・ポツパーもまた、ロビンソン・クルーソーに言及している。^{注34}

「科学的方法の公共性」という問題をめぐってポツパーは、ヘロビンソン・クルーソーはいかにして真理を検証しうるかと問いかける。

ロビンソン・クルーソーが無人島で、物理実験室や化学実験室、天文観測所などを建設し、徹頭徹尾、観察と経験に基づいて膨大な数の論文の執筆に成功し、さらに彼は、意のままになる時間を無制限に持つていたし、われわれ自身の科学者たちに現在受け入れられている諸成果と実際に一致する科学体系を構成し記述することに成功した、と仮定する。こうした「クルーソー的科學」の性格を考えて、それは眞實の科學である、と主張する者もいるかもしれないが、ポツパーは、「クルーソー的科學」は「啓示された」類のものであつて、科學的方法の要素が欠けているから、眞實の科學ではない、とする。クルーソーがわれわれの成果に到達したという事實は、「透視者」の場合と同じく偶然的であり奇蹟的なものである。

なぜなら、彼の成果をチェックする者は彼以外にはいないし、彼以外には彼の特異な精神史の不可避的な帰結である諸偏見を訂正しうる者はいないし、彼自身の諸成果に固有な可能性に関してのあの奇妙な盲目性——これは、彼の成

果の大部分がかなり見当違いのアプローチによって達成された結果であるのだが——を彼が除去するのを手伝えるような者は存在しないからである。そして、彼の科学的論文に関して言えば、彼が科学的方法の一部でもある明瞭で合理的なコミュニケーションの規律を獲得しようるのは、自らの仕事を、それを行わなかつた誰か他の者に説明しようとする試みにおいてのみである。^{注(35)}(強調は原文。)

ポツパーもマルクスやルソー(『エミール』)同様、「科学的方法の社会性」という自己の主張を原型的に強調するため、「科学するロビンソン・クルーソーという虚構」を設け、「無人島」での文字通りの「実験」の(不)可能性を考察している。奇抜な着想であるが、それなりの説得力を發揮している。そのうえでポツパーは次のような注目すべき断言をしている。

ロビンソン・クルーソーのような人物は、多数の困難な状況を克服するに足るほど、十分に賢いかもしれない。だが、彼は言語も論証術も案出しないであろう。^{注(36)}

ポツパーの断定を考慮しつつ、ロビンソン物語を語りの位相において検討してみる。

まずデフォーでは、題名(『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』)からも明らかなおと、語り手としての「私」は、自身の数奇な経験を回想の形式で述べている。こうした語りの位相でも、起源への遡行は顕著である。自己の前史と無人島への漂着までを語りおえたのち——

さてこれから私は、人間が未だかつて経験したことがないような、沈黙の生活の悲しい物語を始めなければならないので、もう一度発端に戻つて、順序を追つて話をして行くことにする。^{注(37)}(強調は引用者。)

そしてまた、ロビンソンがつけはじめた「日記」も、「私」のこうした語りの位相での起源(端初)への強迫的ともいえるような遡行の動きに規定されている。

いくらかこういう心の動揺も静まり、家の道具や住居の問題もかたづいたので、テーブルと椅子おのおのの一つを作り、自分の身のまわりをできるだけ整頓し、日記をつけはじめた。日記の写しを次にお目にかけてようと思う。断わつておかなければならないことは、すでにのべたことがくり返し記されているかもしれないことである。^{注(38)}(強調は引用者。)

無人島での起源への遡行は、現実的・経済的な世界の反復・再生産を招来したのであった。「私」の回想としての物語のなかに出現した「日記」という記述の位相は、基調としての「私」の語りの位相になにひとつ異質の要素を加えることはない。基調としての語りと「日記」との間の境界も、語りついでゆく「私」の表出意識の内部で画然と区別されてはいない。「しかし、とにかく日記へもどろう」(岩波文庫版、上巻百十一ページ)、「しかし、再び日記へもどろう」(同百二十六ページ)、「しかし、このことはこれくらいにして、日記のほうへもどろう」(同百三十四ページ)——頻発する「日記」への回帰は、語りと「日記」の記述の位相が等質であり、地続きであることを示しているだろう。

デフォールのロビンソンは「言語も論証術も案出しない」のである。

起源ではなく未来を指すトゥルニエのロビンソンは、当然、語りの位相でもデフォーとは異なっている。

自らの出自を述べ、「父親」にさからって海に出ては挫折を繰り返すデフォーのロビンソン物語の「序章」に対し、『フライデーあるいは太平洋の冥界』のトゥルニエは、ヴァージニア号の船長が「タロット・カード」でロビンソンの「未来」を占う場面を作品の導入部とする。

デフォーが物語の語りを一人称で統一したのに対して、トゥルニエは三人称で展開していく。「カード占い」の序の部分を別にすれば作品は十二の章から成っており、陸地に背を向けて島からの脱出だけを希求し（第一章）、「脱出号」の挫折による「泥溜り」の段階（第二章）に「背を向けた」後の第三章からは、ロビンソンの「航海日誌 (Log-book)」が開始されていく。この「航海日誌」を作品のなかに組み入れることにより、基調としての三人称による語りにより一人称の語りが交錯されていく。「哲学者ロビンソン」の誕生である。——孤独・他者・時間・顔・言葉（の荒廃）・沈黙・認識すること・欲望・存在するということ・性と死・フライデーとの葛藤など。こうしたテーマ群が、方法としての「島」である無人島すなわちゼロ度の原点から未来へ向けて、しなやかにそして難解に「航海日誌」の語りの位相で考察されている。（因に『フライデーあるいは太平洋の冥界』を児童向けにトゥルニエが書きあらためた『フライデーあるいは野生の生活』（一九七二）では、「航海日誌」の語りの位相は全面的に削除されている。こうしたカットには、「児童文学」というジャンルの基底にもかかわるだろう興味ある問題が存在すると思うが、いまは割愛する。）

「爆発」（第九章）が「水時計」とともに「航海日誌」をも吹き飛ばす。「一人称」として組織されてきた表出の主体がこなごなにくだけ散つてゆく。フライデーの作ってくれた「アホウドリの羽」と「大青の葉をすりつぶした青い染料」を使用して再開される「航海日誌」の記述だけで第十章は占められることになるが、この章では、以前（「爆発」の前）のいわば地上的な一人称ともいえる「わたし」から「太陽・ロビンソン」への変身を希求する「わたし」への転位がお

こなわれ、「わたし」はさまざまな変容に貫かれていく。

——アンドアール（フライデーがたたかった島の大きな雄山羊）はわたしだった。

——わたしはおまえ（太陽）の中心に突き進む矢だ。振子だ。

——ヴィーナス、白鳥座、レダ、ディオスクロイ……わたしはアレゴリーの森の中で自分自身を求めて手探りしている。

語りと「日記」とが表出のレヴェルで一元的であり等質であったデフォーとは異なり、トゥルニエは「三人称」による語りと「一人称」による「航海日誌」による語りというように語りの位相を複雑化させ、さらに「爆発」の前と後で「航海日誌」の「一人称」そのものを異質なるものへと変容させている。

しかし、語り、それ自体はどうか。

たしかにゼロ度としての方法的な〈島〉から未来を目指すことで、ロビンソン〈島〉の要素への変身は果たされたといえるだろう。けれども、語りの位相それ自体を、ゼロ度としての方法的な〈島〉を場として、起源の方へではなく（この方向で語りは、representationとしての機能に収束されるだろう）、未来の方へ、目的の方へと向かって構築することにより、要素としての語り、を直立させる課題は残されたままである。

ロビンソンは言語も論証術も考案しない、とのポップの断言に対峙することが、方法としての〈島〉を構築するための次の課題となるだろう。

むすびに代えて

わたしたちの国には、なぜ、方法としての〈島〉を創出する伝統がないのだろうか。もしかすると、わたしたちは事実としても観念としても〈島〉を実体化しすぎてきたのではないだろうか。「島国（＝日本）」↑↓「国際化」の不毛な循環の根拠のひとつに、実体化された〈島〉ということがあるように思う。

既成の差異づけられた枠組み（宗教―法―国家を頂点とする）をひとまずは宙吊りにして、ゼロ度の時―空を求め、仮構し、そこにおいてみずからの不可避性にせまられた実験を極限までおこなうこと。ここに、とりわけ西欧に特徴的な方法としての〈島〉が追求されてきた根拠がある、と考える。

〈島〉への漂着と〈島〉での実験——小論では「ロビンソン物語」をテキストとして、デフォーおよびトゥルニエのそれぞれの「ロビンソン・クルーソー」の（不）可能性の極限をみてきたが、〈島〉からの帰還という課題の前にデフォーは挫折し（「島」と「大陸」との一体化）、トゥルニエは立ちつくしているように思われる。「ロビンソン・クルーソー」とはひとまず別れて、方法としての〈島〉あるいはヘロビンソンのものをめぐるさらに包括的な対象化作業をすすめていくなかで、〈島〉からの帰還という〈島〉にとって不可避ともいえるアポリアに取り組んでいきたいと思う。

注

(1) ミシェル・トゥルニエ『聖霊の風』諸田和治訳 国文社（一九八六）二二八ページ。

(2) 網野善彦『日本論の視座——列島の社会と国家』小学館（一九九〇）二七一―三〇ページ。

- (3) 本論考では、平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー』(下) 岩波文庫、吉田健一訳『ロビンソン漂流記』新潮文庫を使用した。
- (4) Michel Tournier; *Vendredi ou les limbes du Pacifique*, Gallimard, folio, édition revue et augmentée, 1972.
- (5) マルクス『経済学批判』武田隆夫他訳 岩波文庫 二八七―二八八ページ。
- (6) 長谷部文雄訳『資本論1』河出書房(世界の大思想18) 六九―七〇ページ。
- (7) 大塚久雄『近代化の人間の基礎』筑摩書房(筑摩叢書109・一九六八)所収「ロビンソン・クルーソーの人間類型」(一九四七・八)七〇―七一ページ。
- (8) 大塚久雄『社会科学における人間』岩波新書(一九七七)。
- (9) たとえば、岩尾龍太郎「大塚氏のロビンソン解釈への疑問」西南学院大学文理論集第二六卷第二号(一九八六・二)
- (10) 私市保彦「近代日本におけるロビンソン・クルーソーの運命——明治期冒険小説の比較文学的素描——」思想の科学(昭和四九年一月号)も、ロビンソン物語の日本的受容の特異さを指摘している。

デフォーは、ロビンソンを、単なる物理的に孤立した空間ということだけでなく、そこにおいては、時間も行動も信仰も、まったく新しい意味を帯びるようなある創造的な空間のなかにおいたのであるが、日本における『ロビンソン』の紹介者が、ロビンソンの人間像とその空間の総体を把握できなかったように、垂流の冒険小説家にとって、無人島での冒険と建設の事業は、さらに一面的なものになって行ったのである。一言でいえば、ロビンソンにとって無人島という空間は、まさに創造と実存の空間であったが、日本の冒険小説の作家にとっては、それは、侵略の根拠地という軍事的な意味だけをになわされるのである。

一方では、幕末から明治期の間、日本の多くの漁民たちが、地獄の如き漂流と無人島体験を重ねていたが、そうした庶民の海洋における行動と苦しみはほとんど形象化されず、こうした軍事基地としての無人島のみが形象化されて行ったのは、日本のロビンソンナードのために、まことに不幸な、不毛なことであった。

また、ロビンソン物語の「明治初期翻訳」という視点から日本の受容のしかたの問題をあつかったものとして、猪狩友一「『ロビンソン・クルーソー』の世界とその明治初期翻訳について——“Robinson”と「魯敏孫」の間——」國語と國文學(平成元年三月号)および

- び、やはり同誌同号所収の宇佐美毅「Robinson Crusoe」の明治期翻訳をめぐって——表現構造が作り出す世界——」がある。
- (11) 因に野上弥生子の『海神丸』では、年の暮れに出港した船が嵐に遭って海上を五十九日間にわたり漂流するが、食べ物や水をめぐって四人の乗組員は二派に分かれて敵対し、ついに飢えにせまられて殺人にまで至るが、「島」は最後まで登場することはない。また、井伏鱒二の作品においても、万次郎等五名の漁師たちは漂流し無人島に漂着はするが、「島」での生活は食料と水の確保に費やされ、約五カ月後には米国の捕鯨船に救助されることにより、作品は無人島を離れた別の展開を辿ることになる。
- (12) ヘーゲル『精神哲学』船山信一訳 岩波文庫(上) 一〇三ページ。
- (13) ハンス・ブルーメンベルク『難破船』池田信雄他訳 哲学書房(一九八九) 八ページ。
- (14) Gilles Deleuze; *Michel Tournier et le monde sans autrui*. ドゥルーズのこの論文は、はじめ『クリティック』誌、一九六七年五月号にミシェル・トゥルニエ著『フライデーあるいは太平洋の冥界』(一九六九)の書評として発表され、後に『意味の論理学』(ミニニューイ社・一九六九年)の補論II「幻覚と現代文学」の章に収められ、さらに『フライデーあるいは太平洋の冥界』の改訂増補版が一九七二年、ガリマール社のフォリオ文庫(注4参照)に入るに当たり、そのPOSTFACEとして収められている。邦訳も、丹生谷貴志訳(哲学書房・一九八六年)および岡田弘/宇波彰訳(法政大学出版社・一九八七年)の二種類がある。以下の引用に際しては上記の訳に拠ったが、適宜、文脈にあわせた部分もある。
- (15) 「私は、すでに幾年前のことになるが、こう気がついたのである。どれほど多くの偽なるものを、幼少の折、真なるものとして私が認容(うけい)れてしまっていることか、そしてそうしたものの後に私の積み重ねてきているものが、何であれ、いずれもどれほど疑わしいものであることか、したがって、いつか堅固で渝(ゆる)わることのないものを何か私が、〔学問的〕知識〔ども〕のうちに着せざることを、希求(のぞ)むとするならば、抜本的にすべてを一生に一度は〔断固として〕覆し、かくて最初の土台から改めて始めなければならぬ、と。」デカルト〈第一省察〉冒頭部分。所雄章訳 白水社(イデー選書・一九九一)
- (16) 「私が島を立ち去ってから、彼らが島にやってきてそのあとどんな行動をとったか、その物語は実に興味津々たるものがあり、多彩な事件に富んでいるが、私の物語の前の部分はその理解に資するだろう。また多くの個々の事柄も、私が以前に述べた話に関連してくる。したがって、私としては、後世の読者諸氏が前の部分を読まれることをおすすめることを欣快とする。」岩波文庫版(下) 五一ページ。

(17) 同右、(下) 三五一ページ。

- (18) 前掲、M・トゥルニエ『聖霊の風』二二七ページ。「フライデー」のモデルとなったのは、船からおき忘れられたまま三年と二カ月余りたつて、マス・ア・ティエラ島から救出されたモスキート・インディアンのだが、彼は二十年以上もセルカークに先んじていたのだった。
- (19) Michel Tournier ; *Le vent Paraclet*, Gallimard, 1977, P. 223. 拙訳。
- (20) 前掲、G・ドゥルーズ「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」丹生谷訳 一九一三二ページ、ただし一部改訳。
- (21) 前掲、岩波文庫版(上) 一三四ページ。
- (22) 同右、一八〇ページ。
- (23) 同右、二一〇ページ。
- (24) G・ドゥルーズ前掲論文。
- (25) M・トゥルニエ『フライデーあるいは太平洋の冥界^{リンボ}』原書四二ページ、拙訳(以下同様)。
- (26) 同右、九三ページ。
- (27) 同右、九四ページ。
- (28) 同右、二一八―二一九ページ。
- (29) Au fond tout le problème dans cette île pourrait se traduire en termes de temps, (……)——《*Vendredi* (……)》, op. cit., p. 60.
- (30) 前掲、原書二四五ページ。
- (31) 同右、二四四ページ。
- (32) 『サンジョン・ペルス詩集』新装版 多田智満子訳 思潮社(一九七五)所収の「影像をクルーソオに」より。
- (33) 前掲、原書二四六ページ。
- (34) カール・R・ポッパー『開かれた社会とその敵』小河原誠・内田詔夫訳 未来社(一九八〇)第二部予言の大潮。
- (35) 同右、二〇三ページ。
- (36) 同右、二〇八ページ。
- (37) 前掲、吉田健一訳 新潮文庫版 六九ページ。
- (38) 前掲、平井正穂訳 岩波文庫版(上) 九七ページ。